もりおか 杜陵 ～麺と馬とエトセトラ～

預金融資課　菅原 公仁

１．「不来方のお城の草に寝ころびて　空に吸はれし　十五の心

石川啄木に歌われた「盛岡城跡公園」は、城下町盛岡の中心に位置し、春は「桜まつり」、夏は「いしがきミュージックフェスティバル」、冬は「盛岡ゆきあかり」といったイベントが行われ、市民憩いの場として親しまれています。現在は石垣を残すのみの盛岡城跡ですが、総面積１万平方メートルにおよぶその石垣は、自然石を積み上げた「野面積」、荒く割った石を積み上げる「乱積」、形を整えた石を積み上げる「布積」といったように、様々な手法で形成されており、さながら石垣造りの標本です。四季それぞれに違った顔を見せる中でも、ライトアップされた雪の石垣こそが私のお薦め。その幻想的な姿は、息を呑むほどの美しさです。

盛岡城跡のほど近く、岩手県庁地下一階に店舗を構える当組合は、大正5年1月22日、岩手県職員への金融サービスの提供や庁舎内の物品販売のために「保証責任杜陵購買利用組合」として設立されました。昭和25年5月27日、中小企業等協同組合法の改正により、現在の職域の協同組織金融機関「杜陵信用組合」に改組され、平成28年1月22日に創立100周年を迎えることができました。一世紀という長きに渡り営業できましたことは、全国の信用組合様のご支援によるものに他なりません。この場を借りて、役職員一同厚く御礼申し上げます。平成27年12月末現在、預金積金残高174億、貸出金残高102億円、常勤役職員数15名と小規模な当組合ですが、今後110年、120年、さらに・・と発展し続ける組合となるよう経営努力してまいります。

２．盛岡の魅力

信用組合の会合や酒席などで、当組合の名称「杜陵（とりょう）」の由来についてよくご質問をいただきますので、まずはそこからご案内します。杜陵の杜は「もり」陵は「おか」と訓読みすることから、古くは「もりおか」のことを意味していたというのが語源です。盛岡出身の有名な詩人、石川啄木も望郷の念をこめ、日記などでは好んで「杜陵（もりおか）」の表記を用いていました。地名にこそ用いられることのない表記ですが、今でも小学校名、高校名、会社名などにも使用され、広く親しみのある愛称です。緑豊かな杜（もり）となだらかな丘陵（おか）の風光明媚な街を想像していただければ幸いです。事実「水と緑に彩られた街・盛岡」として、水の郷百選に認定される盛岡市は、北上盆地を貫流する北上川と、奥州山脈を水源とする雫石川、北上高地を水源とする中津川が交わり、岩手山や姫神山といった盛岡を象徴する山並みを中心市街地からも見ることのできる、水と緑に囲まれた街なのです。市内には数多くの湧き水があり、街中を歩く日常の中で、湧き出る天然水が市民の喉を潤しています。

当組合が店舗を置く岩手県庁を南に50mほど歩くと、岩手県公会堂があります。大正12年、当時はまだ皇太子だった昭和天皇陛下のご成婚を祝い、県議会で建設が決議され、昭和2年に完成した国の登録有形文化財です。建物は、現在も各種イベント等に利用されており、当組合でも総代会会場や理事会会場などに利用しています。設計者は、早稲田大学大隈記念講堂（昭和2年）などを設計した佐藤功一博士です。県公会堂は佐藤博士の代表作の一つである日比谷公会堂（昭和4年）とよく似た外観をもち、建物内部には漆喰の美しいレリーフや優雅な曲線のバルコニーなど、創建当時の面影を伝えるアール・デコ様式の意匠が残されており、当時の歴史や文化を感じさせます。このような歴史ある文化財が、現在もなお、利用され続けているのです。また、公会堂庭園内には、「平民宰相」として知られる原敬の銅像があります。この銅像は原敬没後30周年を記念して建てられたもので、高知県桂浜の坂本竜馬像を手掛けた本山白雲の作品です。原敬は岩手を代表する偉人のひとりであり、市内には生家と、それに隣接する原敬記念館の他、墓地があり、今なお、多くの県民らが訪れます。墓石があまりにもシンプルなのは、「墓標には位階級等を記さず単に〔原敬之墓〕と銘記する事」という遺書に従ったため。「平民宰相」としての気構えを感じさせるものがあると言えるでしょう。

岩手県庁の北側に隣接する盛岡地方裁判所敷地内には、国の天然記念物に指定されている「石割桜」があります。周囲23m巨大な花崗岩の狭い岩の割れ目に、樹齢360年を超える直径約1.35mの巨大なエドヒガンザクラが根を下ろしているのです。南部藩家老の屋敷内にあった巨大な岩が落雷をうけ、出来た割れ目に種子が入り込み成長したとも言われています。現在も桜の成長によって、岩の割れ目が毎年少しずつ広がっているというのですから、その生命力には驚かされます。冬になると幹をむしろで覆い100本以上の縄で枝を吊った冬化粧も素敵ですが、やはり見所は春！その荘厳な姿は言葉では伝えきれません。市内で一番早く開花宣言が出されることから、市民からは春の訪れを告げる桜として愛されています。

市内中心部を流れる清流「中津川」は盛岡を象徴する川であり、市街地にありながら水鳥が遊び、岸辺にはカキツバタやワスレナグサが花を結び、秋にはサケが遡上する、自然環境に恵まれた川です。ヒレを擦り切らしながら長い旅路を経てなお、更に上流を目指すサケの姿を見ると、「ああ、俺ももっと頑張らなければ！」と思わずにはいられません。私の好きな情景の一つです。中津川に架けられた「上の橋」は、盛岡発展の一歩として、1597年（慶長2年）盛岡城下を建設した際に造られた城下町盛岡のシンボルです。橋には「京都三条大橋」を彷彿させる青銅製の擬宝珠(ぎぼし)が18個あり、これだけの数が揃っているものは非常に稀で、国の重要美術品に指定されています。1609年（慶長14年）の銘があるものが8個、慶長10年の銘があるものが10個あります。川岸には散策路が整備されていますので、川のせせらぎを聞きながら、ぶらりと歩くのも乙なものです。

３．盛岡三大麺のご紹介

「名物にうまいものなし」などと申しますが、盛岡の三大麺は自信を持ってご紹介できる美味しさ、そして楽しさがあります。

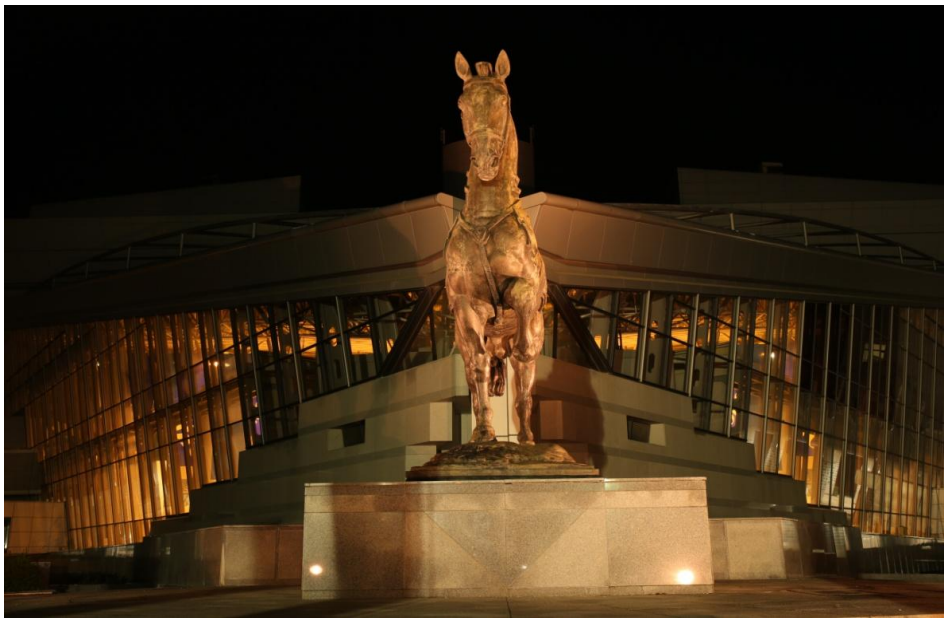
・**盛岡冷麺**：盛岡の麺職人、青木輝人氏が昭和29年に「食道園」を開店した際に、朝鮮半島に伝わる咸興冷麺と平壌冷麺を融合させ、創作したのが始まりです。盛岡冷麺独特の強いコシをもつ麺は、他の麺料理では味わえない食感で癖になること請け合いです。辛さは辛みの元になる冷麺用の特製キムチの量で決まり、小辛、辛口、大辛などありますが、キムチが別に付いてくる別辛がお勧め。はじめは辛みを入れず、透き通った牛骨スープの味を楽しみ、徐々に辛く調節していくのも通な食べ方です。盛岡冷麺は主に焼き肉屋さんで食べますが、ご飯ではなく、冷麺と焼き肉といった組み合わせが一般的であることも、盛岡の特徴ではないでしょうか。

・**盛岡じゃじゃ麺**：中国東北部の麺を参考に、白龍（パイロン）の初代主人、高階貫勝氏が屋台から始めました。茹で上げた平打ち麺の上に特製の肉味噌、刻んだネギときゅうりをのせたものです。おろしニンニク、おろし生姜、ラー油、酢などで味付けをし、よくかき混ぜて食べますが、薬味の分量と味付けは十人十色。じゃじゃ麺ファンはそれぞれ独自のこだわりの味付けでいただきます。麺を食べ終えた皿に生卵を溶き、麺の茹で汁と肉味噌を入れてもらって作る「チータンタン」というスープも必食です。

・**わんこそば**：寒い土地柄でも収穫される蕎麦は、岩手の気候・風土に合い、古くからよく食べられていました。岩手では、田植え・稲刈り・婚礼・お祭りなど大勢の人が集まる宴会の最後にそばを振る舞う風習があり、それが「わんこそば」のルーツと言われています。大きな釜を使っても、一度に全員分のそばを茹で上げることはできませんので、そばをお椀に小分けにして出し、その間に次のそばを茹で上げ、また小分けにして出すという形で振る舞う様が、「わんこそば」の原型だったと考えられています。全国的には、大食い大会のようなイベントで知られているかと思います。店によっての増減はあるものの、おおよそ「わんこそば」15杯が普通のかけそば1杯分にあたります。私は100杯くらい、当組合の職員では130杯くらいが最高記録。盛岡にお越しの際には是非チャレンジしてみてください。「はい、どんどん～」「はい、じゃんじゃん～」と給仕さんのかけ声と共に、お椀を重ねていく様は一興ですが、「もう食べられない」と思ったら、最後の1杯を食べ終える刹那のタイミングで蓋を閉じるということをお忘れなく。油断していると、お椀と蓋の隙間から「どんどん」「じゃんじゃん」そばが追加され、もう1杯、さらにもう1杯と、食べ続けることになるのでご注意を。

４．岩手に見られる馬文化

岩手県は古来より全国有数の馬産地として知られ、馬と関係深い文化を持っています。奥州平泉時代では、一の谷の合戦で断崖を駆け降りたと言われる源義経の愛馬「太夫黒」など歴史に名を残した名馬を輩出し、藩政時代には、人と馬とがひとつ屋根の下で生活できるよう造られた「南部曲がり家」が多く見られるようになりました。「南部曲がり家」とは、馬を大切に思い家族同然に考えていた岩手の人々が、人が暮らす母屋と馬屋を、平面Ｌ字形に棟続きとした農家建築です。また、その時代から各地の神社の境内で行われていた「奉納競馬」や、馬の優秀さを競った「生産地競馬」などが、今の岩手競馬につながっています。近代に入ってからも、盛岡近郊にある小岩井農場で生まれたセントライトが昭和16年日本初の三冠馬となったことや、メイセイオペラが地方競馬に所属する馬として初めてＪＲＡのＧ１レース（平成11年フェブラリーステークス）で優勝したなどは比較的記憶に新しいところです。



岩手の馬文化の話からメイセイオペラの話にまで発展してしまった以上、競馬ファンの私としては、ＯＲＯパークの名で親しまれている盛岡競馬場をご紹介せざるを得ません。入場門を抜けると初めに出迎えてくれる馬の彫像は、ベストアングルから見るとスタンド全体が翼となり、まるで巨大なペガサスのような姿を見せます。これだけでも一見の価値ありです。場内正面スタンド横の芝生では子供を遊ばせている家族連れも多く見られ、アミューズメントパークとしても利用されているというのも、中央競馬には見られない光景ではないでしょうか。颯爽と駆ける駿馬の姿を楽しみたい方には、３階の指定席もお勧めです。地方競馬場では唯一芝のコースを持つＯＲＯパークで、少しの間、英国紳士の気分になって馬を愛でてみてはいかが。

岩手の馬文化を象徴するのは「チャグチャグ馬コ」と呼ばれるお祭りです。毎年6月の第2土曜日に開催される「チャグチャグ馬コ」は、華やかな衣装で装飾した100頭の馬が、滝沢市の蒼前神社から盛岡八幡宮まで、約13㎞の道のりを練り歩くパレードです。大切にしている馬に豪華な装飾をつけることで馬の勤労に感謝するお祭りが受け継がれてきたのだと考えられています。馬のあでやかな飾り付けとたくさんの鈴が特徴で、歩くたびにチャグチャグと鳴る鈴の音が名称の由来であり、沿道に響く風情ある鈴の音は、盛岡初夏の風物詩として、環境庁の「残したい日本の音風景100選」に認定されています。

５．おわりに

今回盛岡を中心にご紹介しましたが、本州で一番広い岩手県は、世界遺産「平泉」「橋野鉄鉱山」や世界有数の透明度を誇る地底湖を持つ「龍泉洞」、三陸リアス式海岸などなど、まだまだ見所は満載です。魅力いっぱいの岩手・盛岡を表現するため、あと10ページほどいただきたいところではありますが、それは無理というもの。かかる上は、実際に来県し、魅力を体験していただくしかありません。是非とも、岩手・盛岡にお越しください！

参考文献

岩手県公会堂パンフレット

photo

「石割桜」： 岩手県観光課　様

「OROパーク」： 岩手県競馬組合　様

作品名 「馬像の夜」　撮影 横山典視　様

※市販されているポストカードの画像を使用させていただきました。

「わんこそば、他」： 川口印刷工業株式会社　様

ご協力いただいた方々に深く御礼申し上げます。

あとがき

平成28年1月22日、創立100周年の記念に役職員でわんこそばにチャレンジしました。10数年ぶりの開催にも関わらず、今回自身の記録を更新した者が多数いました。これが100周年の効果なのでしょうか（笑）特筆すべきは、初のチャレンジとなる佐々木主事、開始前にただ一人高校時代のジャージに着替える万全の戦闘態勢で、見事200杯を平らげました！女性職員も1位100杯、2位78杯（初チャレンジ）、3位75杯と大健闘。いつもの酒席とはひと味違った盛り上がりをみせたわんこそば大会でした。

参加者14名（男性8名、女性6名）

１位	事業部	お客様サービス課	佐々木和也	200杯（初チャレンジ）
２位	事業部	お客様サービス課	長尾勉	150杯
３位	総務部	総務企画課	小林裕之	135杯

真っ赤なジャージを身にまとい「赤は食欲増進と闘争心を上げる効果があるんですよ」と、軽快に箸を進める佐々木主事の勇姿
・・・なるほど、納得。